

被侮辱時の感情に対する謝罪の効果—前頭脳活動の検討—

坂元春香

指導教員 村田明日香

日本人が日常で多く用いる“クッション言葉”は、ネガティブな印象を緩和するため、相手に怒りや不快感情を与えてしまうであろう発言や行為の前置きとして使われている前置きの謝罪である。一方で通常の謝罪は、発言や行為の後になされるものである。謝罪の効果についてはこれまでにいくつかの研究がなされ、その怒り鎮静効果が明らかにされてきた。本研究では、そうした謝罪のタイミングの違いが怒りの生起と前後することによる、謝罪の怒り鎮静効果の変化を見ることを目的としたものである。このことを検討するために、実験参加者へ向けられた辛辣な評価をフィードバックして怒りを喚起し、怒り感情の指標である前頭域の脳波を記録して α 帯域におけるパワースペクトルを分析した。その結果、先行研究では左右差が有意に示されていた前頭部(F7, F8)においては左右の α パワ値に有意な差が見られず、フィードバックによって十分な怒り感情が生起されたとは言えなかった。またフィードバックの前後で左右の α パワ値を比較した場合にも有意な差は出しておらず、謝罪のタイミングの効果も見られなかったといえる。しかし本研究では、先行研究と異なり頭頂部(P3,P4)において、左右の α パワ値についてフィードバック前、フィードバック中、フィードバック後の各時点で条件間を比較した場合に謝罪の効果が有意に現れていることがわかった。今回の実験では怒りの喚起が十分でなかったことにより謝罪のタイミングによる怒りの鎮静効果の変化を確認することができなかったが、怒りの喚起方法の改善を行い、頭頂部の脳活動が怒り感情とどのように関連するかを明らかにすることで、検証できるようになることが考えられる。